

れたり。同産地の豫備的試掘に依り、炭層は 1.5m 乃至 4m に達すること明瞭となり、又同炭の分析に依り其年 齡上本炭は所謂クンギトに屬すること判明し、其火力は 遙に褐炭を凌駕せり。本炭の最初の試験は本年冬季行は れ、之が爲輕便鐵道敷設せられたり。新市オハに對する 燃料供給上特に重大なる意義を有する本新産炭地の埋藏 量の研究を目下企圖し居れり。

マールイ・ヒンガン山脈に於ける鐵鑛量の確定 地質學 的調査の最終的結果に依りてマールイ・ヒンガン山脈に 於ける鐵鑛埋藏量は 3,900 萬噸と確證せられたり。(海外 經濟事情四ノ五五)

**ユーゴスラヴィア國アルミニウム原鑛 産出輸出狀況** (昭和 6 年 5 月 21 日著在ルーマニ ア藤田特命全權公使報告) アルミニウム鑛に銅鑛と共に ユーゴスラヴィア國の二大重要鑛産物なるが、銅鑛に 對しては國內の需要相當にあるも、アルミニウム原鑛た るボーキシットに對しては極めて少量の國內消費あるの 外、其大部分は國外輸出品なり。

而してユーゴスラヴィア國のボーキシットの産額は 年々増加の傾向にあり、目下世界の第 4 位、歐洲の第 3 位を占め居れり。

ユーゴスラヴィア國のボーキシット鑛脈は同國山岳 地方至る所に之を發見し得るも、質と量とに於て勝れた るはアドリアテック海の一部諸島、同海に接近せる内地 殊に沿岸地方一帯に在る鑛床なりとす。以上の中目下採 鑛に従事せるは僅に Kin 及 Benkovatz 兩郡にある下 の 6 坑のみなり。

(1) Umei アドリアボーキシット會社所有に係り、 1920 年以來合理的採鑛を爲しつつあり、ユーゴスラヴィ ア國最大の鑛坑にして、其産額は同國年産額の約 8 割 に相當すと云ふ。

(2) Kalum フランツアマルン及ザグレブアルミニウ ム會社所有。

(3) Dili Jodraski Boksili 會社所有。

(4) Krusenovo フランス國アンドレ・アンリイ・コルム ニエ所有。

(5) Jesenice 同 1927 年採鑛開始。

(6) Rid 故ドラクホルスリツクの繼承者所有。

以上各坑の 1920 年以降採鑛量次の通り。

年次	(單位噸)					
	Umce 坑	Kalum 坑	Dili 坑	Krusenovo 坑	Jesenice 坑	Rid 坑
1920	9,123	2,374	4,220	3,400	—	—
1921	3,200	1,001	3,320	2,500	—	—
1922	12,050	10,000	4,240	5,000	—	—
1923	16,908	4,600	4,320	—	—	—

1924	7,544	400	641	—	—	10,300
1925	53,850	7,615	2,476	12,319	—	1,000
1926	102,859	8,419	9,667	10,864	—	—
1927	78,903	7,928	6,879	1,825	4,766	—

尚 1919 年以降全國産額次の通り。(噸)

1919 年	1,213
1920 年	19,117
1921 年	10,021
1922 年	31,290
1923 年	26,828
1924 年	18,885
1925 年	77,269
1926 年	131,839
1927 年	109,306
1928 年(自1月至10月)	47,378

上述の如く本鑛の國內消費は極めて少量にして、アル ミニウム工場としてはモステイ (Lyublijance 附近) に 小工場 1 箇所あるのみ、即ち大部分は原鑛の儘輸出せら るゝ次第なるが、1920 年以降の輸出量及其金額次の如し (但金額 1 デイナールは邦貨約 3 錢 6 厘に相當す。)

年次	輸出量(噸)	金額 (100 萬 「デイナール」)
1920	280	22
1921	2,940	176
1922	38,515	5,947
1923	8,360	2,689
1924	—	—
1925	53,704	8,460
1926	96,715	11,110
1927	97,380	1,090

主なる輸出先及其輸出數量次の通り。(單位噸)

年次	ドイツ	英國	ノール ー	米國	フラ ンス	オラ ンダ	イタ リー	オー ス トリー
1920	61	—	—	—	—	—	—	219
1921	1,834	—	—	—	—	—	525	588
1922	21,029	—	—	—	17,225	—	2	39
1923	5,000	—	—	2,750	—	—	568	41
1924	26	—	—	—	—	—	—	—
1925	1,000	8,550	53	34,200	500	10,400	—	—
1926	5,700	—	—	62,700	—	28,270	170	45
1927	13,000	—	—	22,950	—	51,250	10,119	—

以上に示す如くユーゴスラヴィア國のボーキシットの 主要なる輸入國は米國、オランダ、ドイツ、ノールウェー なるが、就中アルミニウムを多量に産出する米國は原鑛 の不足を感じ、タルマチャ及エルツェゴヴィナの鑛脈に 著眼し居れり、又ドイツはユーゴスラヴィア 國內ボーキ シット産出のコントロールを目的とせる一會社を創立し たり。

ユーゴスラヴィア國には未だ完全なるアルミニウム製 造工場なく、前顯モステイの工場も單にアルミニウム半 製品として輸出するに過ぎざるが、1923 年以降の其輸出 の狀況を見るに次の通りなり。

年次	數量(噸)	金額 100 萬 「デイナール」
1923	304	32
1924	284	30
1925	830	10
1926	4,000	50
1927	321	9

以上の如くユーゴスラヴィア國は原鑛 ホーキシツトの輸出國なるも、他面製品たるアルミニウムに對しては輸入國にして、同國の 1919 年以降のアルミニウムの輸入次の通り。

年次	數量 (kg)	金額 (「ドイツナール」)
1919	40,238	635,040
1920	28,534	1,181,202
1921	15,257	3,716,666
1922	88,801	4,269,614
1923	79,377	4,470,729
1924	168,733	9,740,395
1925	78,343	6,548,257
1926	90,199	6,911,611
1927	165,971	10,092,856

(海外經濟事情四ノ二三)

### ドイツ國アルミニウム半製品カルテル成立

(昭和 6 年 5 月 1 日附在ドイツ長井商務書記官報告)

今般フランクフルト・アム・マインに開催せられたるアルミニウム延板組合會議に於て、久しく懸案となり居たる組合員の一定販賣量及價格の統一に關するカルテル成立の運に至れり。斯業に於ける二大權威會社 Die Vereinigten deutschen Metallwerke と Aluminium-Walzwerke との間には既に販賣量の協定は存在し居りたる處、今回の會議に於て一定販賣量に對してのみならず、其他の點に付ても反對意見を有し居りたる 2、3 小會社も本カルテルに加入するに至れり、而して消費者側よりの半成品註文は殆ど本年未迄製造會社が手一杯に動き得る程度に有し居る處、以上註文は今回成立のカルテルに持込まれることとなり、目下の註文は閑散なり、一方供給は順調に行はれ居れり、而して各延板製造工場は今や販賣量を限定せられたと雖、定量を超えたる販賣に對しては特定金額を調停金庫へ支拂ふことに依り、依然供給は順調に進行するものと觀られ居れり、中央販賣所の成立を見たる次第に非ざるを以て販賣は従前通り各工場より直接註文主へ對し行はるゝものなり、尙半製品價格の引上は當分行はざるべしと傳へらる。

(海外經濟事情四の二三)

### 博山地方産耐火粘土の産出、輸出及用途

(昭和 6 年 5 月 15 日附同 27 日著在博山町田出張所主任報告) 博山耐火粘土石出産經緯—本邦向輸出—埋藏量可採量—品質分析—特質及用途—取扱者

博山耐火粘土石出産經緯 博山地方は古來石炭の採掘と共に陶器の産出を以て知られ、從て陶器原料粘土石の採掘力相當古くより行はれしは想像に難からず、而して博山粘土が耐火材料として、邦人の著目する所となり斯業開拓に至りしは日獨戰直後大正 4 年にして、當時邦人

博山窯業工廠を創立し、博山粘土を原料として窯業を營み、次て大正 7 年末日華窯業株式會社の設立を見るに至り、其事業見るべきものあらんとしたるも、其後財界の不況に伴ひ事業の不振を來し、日華窯業會社は解散の止むなきに至り、現地邦人による斯業の發展は頓挫を來せるが、一方耐火粘土原石の採掘と之が本邦向輸出は依然邦人の手にて繼續せられ、本邦に於ける耐火原料として漸次博山粘土の需要を喚起し今日に至れり。尙最近當地斯業者は製産經濟の見地より採掘地に於ける焙燒を開始し、燃料の低廉なる當地に於て燒成の上輸出を行ふに至り、本邦斯業界の歓迎を受け居る趣なり。

本邦向輸出狀況 最近 6 年間に於ける博山耐火粘土の本邦向青島港輸出量次の如し。

年別	輸出量
大正 14 年	3,500 噸
大正 15 年	2,220
昭和 2 年	12,430
昭和 3 年	7,463
昭和 4 年	11,200
昭和 5 年	9,398

而して之が最近賣買價格は青島港船積渡噸當り金 6 圓見當なりと云ふ。尙之が取扱經路を示せば次の如し。

(1) 博山に於ける邦人の本品取扱業者は採礦中國人と買礦契約を結び採掘粘土を引取る。

(2) 本邦需要者の希望により焙燒品或は原石の儘膠濟鐵道により青島に輸送し、同地に於て船積輸出す。

博山耐火粘土石の埋藏量及可採量耐火粘土の分布は博山炭田一帶に亘り最上層部及各其夾炭層間に數層夾在するものも、茲には主として本邦輸出向耐火礫石及耐火青土層たる其最上層粘土石に就き略説せんとす。博山耐火粘土石の埋藏量及可採量に付ては未だ實測の據るべきものなきも、博山炭田實測面積により是等粘土の主分布層を想定し埋藏量約 600 萬噸と推定し得べきか。

是等粘土礦區の表面積を約 41 萬坪、平均層 6 尺比重 2.6 と見積る計算にて、

$$410,000 \times 6 \times 2.6 = 6,396,000 \text{ 噸}$$

又之が可採量は埋藏量の 60% と見積り 360 萬噸と推定せらる。博山炭田中以上の外小分布區及隣接淄川礦區等に於ける粘土、或は下盤夾炭層中に夾在する大青礫層(土民の陶器原料とする粘土)等を合算すれば、博山地方耐火粘土の埋藏は其豊富なること他に類を見ずと稱せらる。

品質分析 現下本邦向輸出せらるゝ博山耐火粘土は其形狀及品質により礫石及青土の 2 種に分れ、之が賦存分布の割合は礫石 8 割、青土 2 割と想定せらる、即ち前記